

寧化に黄慎の遺址を訪ねて



黄慎「仙子漁者圖」

本館所蔵の阿部コレクション中に黄慎「仙子漁者図」がある。黄慎(1687-1772頃)は字を恭寿といい、癭瓢・放亭・硯耕などと号した。詩書画とりわけ人物画に優れ、「揚州八怪」の一人に数えられる。「揚州八怪」とは揚子江畔に栄えた商業都市揚州を舞台に活躍した書画家の一群を指すが、それぞれの出自や経歴は様々である。

黄慎とはといえば、本図の落款に「寧化黄慎」とあるように、今の福建省寧化県の出身である。貧しい家庭に生まれ、14歳で父を喪い、苦学しながら画を売って生活を支えた。各地を遍歴して画名を挙げ、雍正2年(1724、38歳)から同12年の間、揚州に客寓した後、老母を養うため寧化に帰った。そして乾隆16年(1751、65歳)再び揚州に来て盛名を負い、同22年まで滞在、以後は福建で売画生活を送りつつ寧化の家中に没した。

今秋「揚州八怪」展を開催するにあたり、黄慎の故居や墓地などが今も残されているとの情報から、遺址の調査に赴くこととした。揚州から遠く離れた彼の故郷を訪れ、その地理を知り、風光や習俗を体感することは、その詩文や書画を理会するうえで大きな一助となるからでもある。

さて寧化は、福建省とはいえ、福州・泉州・厦門などの沿海の大都市とは異なり、江西省境に近い山中にある。この辺りをバスで走ると、幾重もの山々の合間にある平地に町や村が点在していることが判る。年々道路事情が良くなっているとはいえ、厦門から高速バスで4時間弱を要する(今回は寧化まで30km余のところまでバスが故障したため、5時間以上かかった)。街の広場には郷里の誇り黄慎の立派な肖像が立っていた。

着後、寧化城中にある黄慎紀念館(故居)を訪ねてみた。場所は「寧化县翠江鎮紅色巷4号」。百度百科では「紀念館は磚(レンガ)と木でできており、南方民居の風格で、典型的な清代建築である。清代に建てられ、幾度もの修繕を経たが、なお古樸な風貌を保持している。寧化县重点文物保护单位に列せられている。」とある。だが、現在は故居を示す標識すらなく、図のような惨状であった。

翌日、县城から東へ32km程の湖村鎮張家湾にある蛟湖を訪れた。あいにくの曇天だったが、湖水はエメラルドグリーンに輝いている。面積は18畝というから1.2ha程しかないが、水深は200m以上あるそうだ。この周辺は石灰岩の特殊な地質で、近くには巨大な鍾乳洞群「天鷲洞」があ

る。この湖も湖底から水が湧き、晴れても旱れず、雨がふっても溢れず、「竜王潭」の別称がある。黄慎の詩集に『蛟湖詩鈔』があるように、この湖の傍らに書齋「蛟湖草堂」を作り、読書作画していたのである。近年新たに「黄慎紀念草堂」が建てられていた。なお、展覧会では山水の大幅「蛟湖読書図」(上海博物館蔵)も借用展示予定である。

午後、城中に戻り「黄慎墓」を訪ねることとした。インターネット上では墓地を訪問した記事は散見するものの、具体的な場所を示す記述に欠ける。「寧化城北郊1.5kmの茶畑を背にした果樹の山中で、東は黄河竜水庫に臨し、西は寧化から建寧に向かう公路(中環北路)に臨している」といった曖昧なものだけで、地図上で見るとかなり広い範囲である。近所の方に何うも知らず、タクシーで中環北路から東へ入る小路を一本一本探したが、夕刻になり断念した。翌朝、再び近くまで行ったところで、所在を知っているというご老人を発見、車に同乗して案内して頂いた。何と街道沿いの細道の最奥の養鶏場である。ここからは養鶏場の方に導かれ、その土地のさらに奥の道なき丘を越えたところに「黄慎墓」があった。地元の中学生在が命日に訪れるようで、周囲の草は刈られ整えられていた。だが南側斜面も刈られていれば墓から眼下に寧化城を見渡せていただろう。故居とともに、もう少し丁寧に保護して欲しいものである。

この他、寧化では揚州知府を務めた伊秉綏の故居と墓、長汀では黄慎の師、上官周の故居や学堂、上杭ではやはり「揚州八怪」の一人である華岳の故里や紀念館などを調査してきた。展覧会の会場や図録などで紹介することとしたい。

(弓野隆之)



黄慎像



黄慎故居



蛟湖



黄慎墓